# 巻頭言

*Preface*

**岸井隆幸**[1]
*By Takayuki KISHII*

昨年2022年は鉄道開業から150年、記念シンポジウムなど様々なイベントが展開された。また、今年2023年は関東大震災から100年、メディアでも防災に関する話題が頻繁に登場している。別に99年でも101年でも同じだろうが、と思いつつも「区切りの良い周年」が来ると不思議に心が動かされる。

我々の人生にも「誕生日（周年）」を節目とした様々な仕掛けがある。子供の健やかな成長を祝うのは七五三。最近までは20歳、今は18歳で成人を祝う。結婚すれば25年で銀婚式、50年で金婚式。一方で厄災が多く降りかかるとされる「厄年」もある。これは男女で異なり、本厄は男性は25歳、42歳、61歳、女性が19歳、33歳、37歳、61歳とされている。また、めでたく100歳を迎えると「紀寿」あるいは「百寿」と呼ばれるお祝いがあるが、実は99歳でも「白寿」がある。長寿を寿ぐのは何回あってもよいのであろう。さらに、不帰の客となった後は、仏式であれば7回忌や13回忌といった法事が執り行われる。こうしてみると、どうも人間は根っから「周年」に弱いと言わざるを得ない。

我々の組織、一般財団法人計量計画研究所（IBS）が誕生したのは1964年7月15日。したがって今年は設立から59年、いよいよ来年は60歳（60周年）を迎えることになる。この60という区切りは人生では「還暦」と呼ばれ、私自身も研究室で赤いチャンチャンコを着せられた覚えがある。いうまでもないが、還暦は「甲・乙・丙・・・」の十干と干支の十二支の組み合わせが一巡することから「生まれたときと同じ暦に還る」まで長生きしたことをお祝いするものである。100年前の平均寿命は45歳を下回っていたから60歳まで生きるというのは、平均寿命が80歳を超える現代で100歳を迎える以上の重みがあったのであろう。

IBSもこのめでたい「還暦」を契機に（あるいは61歳の厄年を迎えるにあたり）、今一度、次の時代に向かって組織の在り方・働き方を考えてみたいと思う。単純！という声もあろうが「区切りの良い周年」を様々に活用するのは、時の流れや自らの変化を意識させる人間の知恵の産物である。

暦が一回りしたのであるから今一度初心に帰ってもよいのだが、実は今年度、当研究所の職員は100名を超えるに至っている。設立当初の職員数はわずか14名であるので、7倍増といえる。当然、大きくなれば大きくなったで、これまでにはない「新しい壁」が出てくる。「新しい壁」を乗り越えるには、何かこれまでと違う「新しい知恵」がいる。

浅草おかみさん会理事長の冨永照子さんは、世の中は変わるが、変わらないのが「義理と人情と心意気」であり、壁を乗り越えるには「勇気・やる気・元気」だという。いかにも浅草らしい考え方である。一方、大阪のコラムニスト小杉なんぎんさんは「越えられへん壁は穴をあけたらええ」という。「わからんことはロマンやということにしとけ」、困ったら「座る場所変えてみたらどうや」。「京都人は過去を生きるんや、神戸人は未来を生きるんや。そんで大阪人は朝から晩まで生きるんや」、これが大阪人の流儀だという。こちらも頷くところがある。

IBSも、IBSの流儀で次の時代を切り拓く新たな知恵を出したい。

ちなみに私は神戸生まれである。大阪とは違う！未来を生きるんや！

1 一般財団法人計量計画研究所　代表理事　博士（工学）